

エッセイ

「国際日本学」のゆくえ——海外からの視点

堀内 アニック

すでに過去のお付き合いを通して知っていたことではあるが、国際日本文化研究センター（日文研）に半年ほど滞在して、いかにもその名前にふさわしく国際性豊かな場所だとつくづく感じている。長年の蓄積による成果だろう。「国際」ということばを真剣に考え、あらゆる角度から「日本研究」の活性化を目指しているようだ。その意味で、他の日本の研究機関に対しても模範的役割を果たしているのではないか。

その名前にある「国際」ということばは「センター」にかかると考えるのが自然だろう。実際、英語名の International Research Center for Japanese Studies はそれを裏付けている。もっとも、英語名では「日本文化」が「日本学」(Japanese Studies) となっている点が注意を引く。英語のタイトルを日本語に戻すと「国際日本学研究センター」となるので、もとの名前と少し違ってくる。

さて、なぜこのような、一見意味がないようなことを話題にするかというと、数年前から、「国際日本学」ということばを頻繁に耳にするようになったからである。私の狭い知見におい

て、それは日本の研究機関の国際交流に関連して使われることばだと思っていた。それが、グーグルで検索したら、今では「国際日本学部」を設けている大学が四つもあることに気がつく。このように、「国際日本学」が研究、大学教育に浸透すると、国際日本文化研究センターも「国際日本学」の「メッカ」のように見られるようになるのではないかと想像してしまふ。さらに「国際日本研究」で検索してみると、日文研が代表幹事機関を務める「国際日本研究」コンソーシアム (<https://cgs.jp>) という組織が存在するのに気がついた。これは二〇一七年九月に発足し、日文研が日本各地で花開いた「国際日本学」や「国際日本研究」を掲げる機関に対して、指導的役割を発揮しようという試みらしい。私が素朴に考えていたことが、もうとっくに実現していたわけだ。

では、いったい「国際日本学」（または「国際日本研究」とは何を指すのだろうか。この現象の元を探ると、実は、数年前どころか、数十年前にまで遡ることになる。私は「国際日本学」がどのような事情で、これほどまでに発展したのかわからないし、ここでは、問題にしようとは思わない。それよりも、この現象が海外の日本研究者の日常をどのように変え、研究者の間でどのように受け止められているのかを素朴に辿ってみたい。といっても、これは主観的な見方で、私の限られた体験に基づいていることをお断りしておく。

読者の中には、これが単純に世界各国（フランスを含めて）で進行中の知識の「国際化」、「グローバル化」の現れで、特に日本に限ったことではないと思われる方もいるだろう。それは確かにそうで、所属のバリ大学も、いつの頃からか、国際化を優先するようになり、様々な政策

を打ち出してきた。それは、主に国際交流という形をとり、海外から研究者を招聘する共同研究や、修士課程や博士課程の学生の留学や海外からの受け入れが活発になった。最近では、英語のみによる修士課程の開設も促進している。また、フランスの場合、EUに研究費の助成を申請するには、英語で研究プロジェクトを説明しなければならぬ。そして、そのプロジェクトの価値を認めてもらうには、自然と、英語で論文を書いたり、国際会議で発表したりすることになる。これは、ヨーロッパ各国が置かれている現状で、そのために人文社会系の分野でも、母国語で書かれる論文が減少している。このような事情と比較すると「国際日本学」という「武器」を利用して国際化を推進している日本には、いくらか独自の特徴があるのではないかと感じる。

「国際日本学」ということばを耳にしたのは、二十年近く前、文部科学省の助成を得て設立されたばかりの法政大学の「国際日本学研究所」から、私が所属する「東アジア文明研究センター」(Centre de recherches sur les Civilisations de l'Asie orientale)に共同研究の誘いがきた時が初めてではないかと思う。模索期間を経て、最終的に確定した交流の形態は以下のようなものだった。すなわち、毎年、当時キンツハイムという田舎町にあった「アルザス日本学欧州研究所」(CEPIA・セジャ)という宿泊施設兼会議場で、双方の関心にかなうテーマで、国際シンポジウムを開くことである。日本からは上記「国際日本学研究所」のメンバーが主に参加し、ヨーロッパからは、テーマごとに新しい参加者を募った。アルザス産の白ワインを飲み、三日間寝食を共にすることは、参加者を近づけるには効果的で、この企画は好評を博した。海外に基盤をおく研究者にとっては、最新の情報を得たり、日本人の研究方法に身近に触れるチャンスが

与えられ、色々な意味で刺激的だったといえる。博士課程の院生も必ず一人か二人交えていたので、学生たちにとっても、大いに勉強になったのではないか。

フランス側の主催者の希望もあって、この一連の国際シンポジウムの利用言語には制限はなく、主に英語、フランス語と日本語で発表が行われた。日本からの研究者は、稀な例を除いて日本語で発表し、ヨーロッパ在住の研究者は日本人であれば日本語で発表したが、たいいていは英語で発表した。シンポジウムの成果として出版物が毎回企画されたとはいえ、その出版物が大きな反響を得たことはない。それは言語のギャップによるところも大きい。共同研究に対する姿勢とも関係しているように思える。毎回、テーマが変わるたびに、参加者も入れ替わり、一度きりの出会いで大きな研究成果を期待することはかなわなかったからだ。そして、「日本学」という枠では、あまり専門的な話もできなかった。結局この企画は、海外に日本研究を発信することと、日本の研究者に海外で発表する機会を与えることが主な成果になったといえる。

このような、微妙な問題点をはらみながらも、この種の形態の国際シンポジウムやワークショップは、その後、目覚ましい発展を遂げる。日本各地の大学機関から研究者が訪れ、ヨーロッパで国際ワークショップを開催し、あるいは、ヨーロッパの研究者が日本でのシンポジウムに招聘された。これらの企画はたいいてい文部科学省の助成を受けており、私たちは、その恩恵を受け、たいへん豊かな交流の機会を持つことができた。ただ、時が経つにつれてマンネリ化し、プロジェクトの「国際性」は紙面だけのものになる場合もあったような気がする。たとえば、研究テーマが一方的に日本側で決められ、フランスの研究者の関心とマッチしないこともあった。「日本学」という漠然とした枠組みがあるだけで、研究の目的がはっきりしない場合

や、あるいは、交流に当てられる時間があまりにも短すぎて、相互の理解は後回しにされることもあった。また、発表演語を日本語に限定されることがあったため、フランス人参加者にとって負担が大きく、発表者が少人数に限られ、交流の質にも影響した。このような試みがすべて「国際日本学」の看板の下で行われていたわけではないが、わたしの頭の中では、このいくつかの難点と「国際日本学」ということばが密接に結びついてしまったことは確かである。

もっとも、日本研究における交流が必ずしもすべてこの道を辿ったわけではない。たとえば、国文学研究資料館が二〇一〇〜二一年にかけてコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所と共に進めた研究プロジェクトなどは、「国際日本学」的難点のすべてを克服したわけではないが、実りある結果となった。そのプロジェクトとは、一つの大きなテーマ（「集と断片」）を決め、その枠の中で、数回の国際シンポジウムを日本とフランスで交互に開催するというものだった。これが、満足度の高い結果を及ぼした理由は、主に二つあげられる。一つは、プロジェクトリーダーが共同研究を真剣に考え、双方の研究機関の特質を生かしてシンポジウムのテーマを決め、毎回外部の研究者に声をかけつつ内容を充実させたこと。二つめは、一定数の日本人研究者が数回にわたってフランスを訪れ、フランスの研究者と親交を深めたこと、そして相手の研究や方法論に対して理解や関心を示したことである。結局、その企画は『集と断片』類聚と編纂の日本文化』（勉誠出版、二〇一四年）という一冊の本に結実した。

「国文学」というと、非常に専門化が進み、孤立した研究分野を想像するが、むしろ、そのイメージを打ち破るため、外部からの刺激が期待されたのかもしれない。国文学研究資料館とは、それ以降も、文学が私の専門分野でないにもかかわらず、共同研究の機会を得た。それは、お

そらく、それまでの取り組みの成果を生かしているからだろう。最近は資料館が手がけているオンライン英文雑誌 *Studies in Japanese Literature and Culture* に論文を載せてもらう経験もできた。この経験や、同誌に掲載された日本人の論文の題名を見て、一番印象に残ったのは翻訳の質である。やはり文学を専門とする人が担い手であるためか、著者の文章を忠実に、かつ上品に表現しようとする配慮が見られる。

このように、今日では各機関の特徴を生かした様々な形態の交流が開花している。それが「国際日本学」の名の下で行われようとなかろうと、従来の日本研究が日増しに国際的になってきているのは確かだろう。その中で、「国際日本文化研究センター」は率先的役割を果たしている。では、このままで、満足すべきだろうか。

私の目には、まだ一つ「国際日本学」の未解決の問題が残っているように思う。それは、次世代の教育である。私はこれまで、日本で教育を受けている大学院生による日本国内での発表会に二度ばかり出席したことがある。一度目は全員日本語で発表し、質疑応答もすべて日本語だった。二度目は全員英語で発表し、私たち「外国人研究者」はそれに対し英語で質問した。すると、質問の意味が通じないケースがほとんどで、通訳が入らないと答えられなかった。「日本」が研究の対象であっても、やはり外国語を話したり、外国語の書物を読んだり、あるいは留学の体験などをしていかないかぎり、「日本学」の国際化は難しいのではないかと思った。外国語といっても、必ずしも英語だけでなく、中国語、ポルトガル語、オランダ語、韓国語、フランス語等でももちろんいいわけで、それを完璧に話す必要もない。自国以外の国の文化と言語に馴染み、関わり続けていくことは、「日本」という国を見つめる上で学術的にも人間的にも、貴重な体験を与える。少し欲張りすぎかもしれないが、「国際日本学」をこの先推進する際に、ぜひ

考慮に入れていただきたいと思う。

(パリ大学教授／国際日本文化研究センター外国人研究員)

(一) 以前はパリ第7大学、パリ第7ードゥニ・デイドロ大学、パリ・デイドロ大学という名前だった。将来さらに変わるかもしれない。